

遙かなる波路

——巖谷小波・「金色夜叉」をめぐる——

吉澤 稔男



あたまを雲の 上に出し

四方の山を 見おろして

かみなりさまを 下に聞く

富士は 日本一の山……

富士山を見かけた折などにふと脳裏に浮かんでくるこの歌、文部省唱歌の『ふじの山』であるが、この詞が巖谷小波（いわやさざなみ）の作であることをご存じだろうか。歌は知っていても、作詞家が誰か、その名を言える人は案外ないものである。

そもそも巖谷小波とは何者かと問う人があっても、それも知れぬ。実を言えば、私自身も大学に入ってFさんに出会うまで小波の存在を知らずにいた。Fさんは大学の二年先輩で、親しく話をするうちに、彼が小波の孫であることを知ったのだ。その時初めて巖谷小波の名を知ったわけだが、それまで数多くの文学作品に親しんできて一端の文学青年を気取っていた私は、Fさんを前にして秘かに己の無知を恥じなければならなかった。

だが、待てよ。小波は知らなくとも、巖谷と

いう姓には聞き覚えがあった。文芸評論家の巖谷大四、仏文学者の巖谷國士……。聞けば大四氏はFさんの叔父（小波の四男）、國士氏は従兄（小波次男榮二の長男）なのだとか。因みにFさんは小波の三女甲（きのえ）の次男である。はあ、そういう繋がりだったのかといたく感心したような次第であった。

その巖谷小波についてであるが、『広辞苑』によれば、「童話作家。名は季雄。一六の子。東京生れ。尾崎紅葉・川上眉山らと硯友社を起し、のち童話文学に力を注いだ。著『日本昔噺』『日本お伽噺』『世界お伽噺』など（一八七〇〜一九三三）」とある。彼の主要な活動の場が児童文学にあったとすれば、道理で一般の文学史には登場しないわけである。詳細な文学史の記述においても、小波の名が硯友社との絡みで語られることはほとんどなく、鈴木三重吉や小川未明らによる大正デモクラシーを踏まえた近代的児童文学成立の先駆者としてさらりと紹介されている程度。うっかりすると見落としでしまいうような扱いでしかない。

要は、小波が切り拓いた児童文学が、明治中

期の近代小説の華々しい勃興・確立期にあつては、ややもすると添え物的に見られていたということなのかもしれない。もちろん、小波とて硯友社に参加してたくらいだから、彼が最初から児童文学を志していたわけではなく、途中で方向転換を図つたという事情を考えれば、彼自身もまた文学の本流から外れたということ意識していたかもしれない。

しかし、小波の存在がなければ、我が国における児童文学の興隆がもう少し遅れたことは間違いない。次世代の鈴木三重吉や小川未明らとの直接の接点はなかったようだが、小波の存在が彼らに影響を及ぼしていたことも充分に考えられる。そういう意味でも、その道を切り拓いた先駆者としての小波の業績はもつと高く評価されて然るべきではないだろうかと私は考えている。

さて、前置きはこれくらいにして、小波の話を進めるにあたり、その経歴を辿りながら、あらためて彼の人物像を紹介していくとしよう。

時は明治三年（一八七〇年）六月六日の朝、この季節には珍しく雷鳴の轟く中、武蔵国麴町谷町武家地——三軒家坂上（明五年、麴町平河町五丁目十番地と改定）の地に巖谷季雄（小波）

は産声をあげた。すでに兄二人と三人がおり、六人目の子だった。父の修は明治新政府太政官の大史であった（書家としても知られ、号を一六と称した）が、巖谷家は江戸中期以来、近江国水口藩の藩医を代々務め、修自身も新政府に仕えるまでは藩医としてその任にあたっていた。したがって、季雄もまた医師になることを期待されて育てられた。

齢八歳にして林学者の松野礪（まつのはざま）夫人クララについてドイツ語を学ばされたのも、将来医学の道に進むのを見込んでのことだった。十歳で平河小学校（後の麴町小学校）を卒業すると、季雄は訓蒙学舎という外国語学校の子備校（私立中学校に相当）に入り、ここでドイツ語と数学を学んだ。折しもその年の秋、ドイツ留学中の長兄立太郎からフランツ・オットーの『お伽噺集』が送られてきた。立太郎はこの本で季雄に初級ドイツ語を勉強させるつもりでいたのだが、季雄は辞書と首っ引きになりながらも、その内容の面白さに惹かれ、貪るようにしてこれを読んだ。すなわち、立太郎の意図とは別に、季雄はこうして早くも文芸の世界に目覚めてしまったというわけだ。

その翌年、季雄は父修の命を受け、下谷仲御徒町の塩谷時敏の家塾に入った。ここでは漢学

と剣道を学んだが、事情があつて三ヶ月ほどで退塾。そしてこの翌年の九月、神田明神下の医学予備校に入学することになった。

こうしていよいよ本筋の医学修行の道に入ったわけだが、実のところ季雄は医学の勉強があまり好きになれなかった。この頃季雄は十三歳。まだまだ腕白盛りの少年だった。学業には身が入らなかつたが、持ち前の社交的な性格から学校ではすぐに友達ができた。

その友達数人で、ある日、医科大学の解剖室を見学に行こうという話になった。とはいへ、まだ十三〜十四の少年たちのことだから、正式な見学許可が得られるわけもなく、結局窓の外から覗き見することになった。

室内では数人の学生たちが人体のそこかしこをメスで切り裂いては参考書を見ながら研究しているところだった。季雄は、その場を一目見るや、たちまち気分が悪くなった。何とも意気地のない話だが、卒倒しそうになって、自分には到底あんなことはできないと思うような有様だった。

これ以来、ますます学業に身が入らなくなり、自ずと成績も下降の一途を辿っていった。友人たちがせつせと勉学に勤しみ、次々大学予備門（後の第一高等学校）に入っていく一方で、季

雄は悩みながらも文芸作品を読み漁り、更にその方面への関心を深めていった。

こんな風だったから、十五歳の時、冷やかに半分で受けた大学予備門の入学試験には落ちてしまった。その所為もあって、医学予備校に通うことが苦痛になり、その翌年、季雄は父や兄にも無断で学校に退学届を出して、神田西小川町にできて間もない独逸学協会の学校に一人で転学することにした。この年、兄立太郎の強い指示で二度目の大学予備門の入試に臨むも、故意に落第。すでに医学の道に進むことは諦めていた。そして、季雄はますます文学にのめり込んでいくのであった。

なお、この年（明治十八年、十六歳）の夏季休暇中に、季雄は『一珍可笑夢』『かちかち山後日譚（後に『かちかち山狸記念碑』と改題）』の二篇のお伽噺を創作している。予備門入試の直前のことであった。

ところで、小波といえば、一説には彼が尾崎紅葉の『金色夜叉』の主人公間貫一のモデルだと言われていたようにも聞いているが、読者諸兄におかれてはご存知や否や。この件については次のような経緯があったのである。

二度目の予備門入試に落ち、夏休みも終わっ

て間もない頃、季雄は父の親友である漢学者の川田甕江（おうこう）の塾に入るようになった。入塾するにあたり、父修と甕江との親しい間柄から、特別に入塾祝いの会が甕江の家で開かれた。季雄は父に連れられて牛込若宮町の川田邸を訪れ、そこで運命の女性に出会ったのだ。彼女の名は綾子、甕江の三女で年はまだ九歳。髪を稚児髷に結って、肩にも大きく肩上げをしたあどけない少女であった。七歳上の季雄は、綾子を一目見るなり、その愛くるしさにすっかり魅せられてしまった。

川田塾でははじめのうち寄宿生活を送った。季雄はそこから神田西小川町の独逸学協会の学校に通ったが、学校はせいぜい午後二時頃までだったから、帰ってくれば自由な時間がたっぷりとあった。塾の講義は一週間に一度か二度あるきりで、甕江の『左伝』の講義を聴くだけだった。川田塾は万事放任主義でおおらかだった。それをよいことに、自由時間には季雄は相変わらず好きな本を読んだり、小説紛いの書き物をしたりして過ごしていた。

その頃、綾子は四谷見近くの華族女学校（後の学習院女子部）に通っていた。そして、学校から帰ってきて琴の稽古や予習を済ませると、綾子はしばしば季雄のいる書生部屋に遊

びに来るようになった。綾子は季雄を兄のように慕ってよくなつた。季雄もそんな綾子を快く受け入れ、二人の仲は毎日に親密になっていった。

川田塾での寄宿生活は半年余り続いた。ところが、そのうちに居心地がわるくなってきた。綾子の兄の鷹に色里に誘われたり、同室の先輩書生から性的な悪戯をされたりしたのである。こんなところに居ては大変なことになると純朴な季雄は思いつめ、悩んだ末に長兄の立太郎に頼んで塾から退かせてもらうことにした。

しかし、その後も季雄は週一回の講義には通うこととし、また講義のない日でも学校帰りにしばしば川田邸に立ち寄りた。もちろん、それは綾子に会うためであった。

さて、この頃から季雄は書いた物を新聞等に投稿するようになり、翌年（明治二十年）の正月には『書の事』『書評に就て』『束髪の説』等の作品が読売新聞に掲載されている。また、独逸学協会学校で知り合った高階柳蔭が偶々硯友社の創設メンバーの一人である石橋思案と親しかったことから、季雄は彼の紹介で文学結社硯友社に入ることとなった。明治二十年一月のことである。しかし、当初は専ら友人の高階

を通じて投稿していたので、その後しばらくは尾崎紅葉や山田美妙らとの交流はなかった。そして、硯友社の機関誌『我楽多文庫』に初めて季雄の作品『真如の月』が掲載されたのは六月のことだった。

その一年後の五月二十五日に『我楽多文庫』の公刊発売本の第一号が出ているが、季雄はこの号から漣山人（さざなみさんじん）の筆名で小説『五月鯉』の連載を始めている。内容はたわいない少年の淡い恋心を描いたものであるが、そこに登場する良家の令嬢は川田綾子を念頭において書かれたとされている。当時の文学界ではまだ戯文調の文章が多かった中で、この『五月鯉』は言文一致体で書かれており、その新しい表現方法が先駆的だとして注目された。この年（明治二十一年）の五月三日に漣は初めて紅葉に会っている。以来、二人は急速に親交を深めていった。漣より二歳年上の紅葉は兄貴分として漣を可愛がり、文芸上のこととはもとより、一身上のことについても何くれとなく面倒をみてくれたりもした。

硯友社に入ってからというもの、漣は次第に創作活動を活発化させていったが、一方で勉強もまだ続けていた。明治二十一年の九月に独逸学協会学校普通科を卒業すると、その後漣は同

校の専修科に進んで法律と経済学を学んでいる。その前年の六月には麹町の番町教会でドイツ人宣教師の説教の通訳を務め、これが縁で漣は番町教会の会員に選ばれ、洗礼を受けた。また、その年の九月には立太郎の命令で小石川久堅町にあった杉浦重剛の称好塾に入り、三度目の寄宿生活を送ることとなった。そこに江見水蔭と大町桂月がいた。兩人とも文学を志していたので、漣とはすぐに意気投合して親しくなった。

しかし、こうして学業を続けながらも、作品が雑誌に掲載され、単行本もぼつぼつ出て原稿料が多少なりとも入ってくるようになってくると、漣は学校で法律や経済学を学ぶことに意味を見出せなくなっていた。さりとて文学で身を立てるのも決して容易なことではないとも考えていた。

そんなことを思い悩んでいたある日、漣は杉浦重剛に呼び止められ、君がほんとうに文学の道に進みたいのなら、確固たる決意を示せと迫られた。そうすれば立太郎に話をして説得してやらんこともない、と杉浦は言った。漣にとっては思ってもいなかった有り難い話であった。この翌日の夕方、偶々塾の仲間が庭で焚火をしているのを見ると、漣は急いで自室に行き、

学校で使っていたノートを、文学に関するものを除いて、すべて持ち出して焚火にくべて燃やしてしまった。そして杉浦のところへそのことを報告に行った。漣がもう学校には行かないことにしましたと告げると、それなら仕方がない、兄貴を説得してやるう、と杉浦は請け合ってくれた。ただし、私の顔を潰すようなことはしてくれるなどと言って、杉浦は穏やかな笑みをたたえながらも、釘を刺すことも忘れなかった。明治二十二年の四月のことであった。

かくて漣は独逸学協会学校専修科を退学し、いよいよ晴れて文学の道に進むことになったという次第である。

さて、漣山人＝巖谷小波について語ろうとすれば、『こがね丸』に言及しないわけにはいかないだろう。この『こがね丸』こそ、漣の文士としての地位を確固たるものとし、その後の進むべき道を切り拓いた出世作となったことにご承知の通りである。その経緯を次に記す。

弱冠二十歳にして文士の道を歩み始めた漣は、それまでにいくつかの小説を書いて雑誌に発表していた。しかし、それらはいずれも自分の身辺にまつわる出来事をもとに書いたもので、言ってみれば作品の世界が狭く、幅と奥行

に欠ける嫌いがあった。文章に瑞々しきはあっても獨創性に乏しく、未熟な印象は拭い切れなかった。要は大人向きではなかったのである。漣自身もそのことは自覚しており、同じ硯友社仲間の紅葉や美妙らにはやはりかなわないという思いを抱いていた。彼らと同じ土俵に立ったのでは、とても太刀打ちできないだろうと思っていたのである。



尾崎紅葉(左)と、明治23年21歳

そんなふうには文士としての先行きを思い悩んでいた漣のもとに、ある日、博文館の大橋新太郎が訪れ、新しく発刊する「少年文学」という叢書の企画を持ち込んできた。明治二十三年十一月初めのことである。博文館は当時新興の大出版社で、越後長岡出身の大橋佐平が経営しており、新太郎はその息子であった。新太郎は漣の書いた『五月鯉』『妹背貝』等の作品を読み、その清新な作風に触れていた。そこで、この新企画を進めるにあたり、漣に白羽の矢を立てたという次第である。

漣は新太郎の持ち込んだこの企画に大いに興味を掻き立てられた。その申し出を恰も天啓のように聞き、そこに忽然と新たな可能性が開けたという気さえした。そもそもが十歳の時にオットーの『お伽噺集』をドイツ語原文で読み、それがきっかけで文学にのめり込むようになった漣であった。「少年文学」という方向性は悪くはないと考えたとしても不思議ではなかった。漣は新太郎のこの申し出を快諾した。

それからひと月ほど新作のプランを練り続け、腹案がまとまったところで、今度は漣の方から博文館に新太郎を訪ねて行った。会ってその筋書きを話したところ、新太郎はこれに多大なる関心を示した。

漣は早速作品の執筆にとりかかった。自身の記した「凡例」によれば、「ゲーテの *Reineke Fuchs* (狐の裁判) その他グリム、アンデルセン等の *Maerchen* (奇異談) また我邦には桃太郎かちかち山を初めとし、古きは『今昔物語』『宇治拾遺』などより、天明ぶりの黄表紙類など、種々思ひ出して、立案の助けとなせし」とあり、これら諸作を参考にしつつ、こがね丸という犬を主人公とした亡き父親の仇討物語を書いたという次第。原稿用紙にして七十枚。これを五日で一気に書き上げたという。

作品が完成するや、漣は、当時の文壇の重鎮の一人と目されていた森鷗外に序文を書いてもらうつもりで、本郷千駄木町の鷗外の居宅を訪ねた。その一年前、漣は演劇改良問題で鷗外と誌上で論争し、『しがらみ草紙』を『ひからび草紙』などと揶揄して、却ってこっぴどく反論されたことがあった。それで多少気の引けるところはあったものの、お坊ちゃん育ちで、生来物にこだわらない性質の漣は臆することもなく鷗外に会いに行ったのだった。

鷗外は快く漣を迎え入れ、論難された皮肉を口にしながらも、鮎やビールを出して歓待してくれた。序文を引き受けてくれたことは言うまでもない。ちょうどその日は、鷗外の親友の賀

古鶴所も来ていて、漣は一緒に一時間ほど歓談して引き揚げてきた。

『こがね丸』は翌年(明治二十四年)一月に、博文館より新叢書『少年文学』第一篇として刊行された。鴟外はこれを評して「奇岳小説(探偵小説)に読む人の胸のみ傷めむとする世に、一卷の穉(おさな)物語を著す。これも人真似せぬ一流のこゝろなるべし(「序文」)とその文学的新しさを称揚した。年明け早々に開かれた硯友社同人の批評会でも「新しい文学の誕生だ」と皆から言われ、好評を博した。やがて、『こがね丸』は一般の人々の間でも話題となり、大きな反響を巻き起こした。これにより漣の名は一躍世に知れるところとなり、漣は自信を深め、「少年文学」への決意を固めたのであった。

ところで、漣はこれまで作品を言文一致体で書いてきた。しかし、『こがね丸』を書くにあたっては敢えて擬古文調、悪く言えば講談調の文体を採用している。これについて漣はその意図するところを、「ひたすら少年の読みやすからんを願ふてわざと例の言文一致をも廃しつつ。時に五七の句調など用ひて、趣向も文章も天晴れ時代ぶりたれど、これかへって少年には、誦しやすく解しやすからんか」と述べている(「凡例」)。この時すでに漣はその後の口演活動をも

見据えていたのかもしれない。

実際、どんな文体で書かれているのか、御存じない方のために冒頭の一節を引くと、「むかし或る深山の奥に、一匹の虎住けり。幾星霜をや経たりけん、軀尋常の犢よりも大く(ママ)、眼は百鍊の鏡を欺き、鬚は一束の針に似て、一度吼れば声山谷を轟かして、梢の鳥も落ちなんばかり。一山の豺狼麀鹿畏れ従はぬものとなかりしかば、虎はますます猛威を逞うして、自ら金眸大王と名乗り、数多の獣類を眼下に見下して、一山万獣の君とはなりけり」……とまあ、こんな調子である。ルビは敢えて省略したが、今となつてはまさに古文であり、相当の読書経験を積んだ方でもない限り、これを難なく読めるとは思われぬ。ましてや子供が読んで理解するのは至難の業と言うべきだろう。しかし、大人が朗読して難解な語彙の説明を加えながら読み聞かせるとすれば、さぞや名調子も活きてこよう。「誦しやすく解しやすからん」と漣が述べているのは、おそらくは朗読を想定してのことであつたろうと思われる。

後に漣は各地の小学校等に招かれて口演活動にも力を入れているが、実際にその活動を始めるにはもう少し時を待たねばならない。

なお、これは余談だが、この作品中にこがね

丸を助けて仇敵である虎の金眸大王を共に討ち取る仲間の獵犬が登場する。その名を鷲郎という。察しのない方はお気づきと思うが、小波の三男平三(映画監督)の長男の名が鷲郎というのだ。巖谷鷲郎氏と言えば、一時期岩波映画の監督をされていたこともあるから、もしかしら読者の中にはご存知の方もおられるかもしれない。

こうして『こがね丸』の成功で一躍名声の高まった漣は、その後精力的に創作活動に励んでは次々と新聞や雑誌に作品を発表していった。まさに水を得た魚の如しであった。

とはいえ、当時漣はまだ二十二歳の若輩で、さすがに恋に恋する歳ではなかったが、やはり異性に関心がないわけではなく、時折肉体的衝動に駆られることがあつたのも事実である。硯友社に加わり、紅葉らと親しく交わるうちに自ずと色町にも足を運ぶようになっていた。

硯友社の同人たちは皆漣より年上であつたし、当時の男たちの常として色町で遊ぶ者が多かった。漣も紅葉らに誘われるままに、料亭で芸者遊びを覚え、吉原へ繰り込んだりするようになっていったのである。

その頃、芝公園二十号地に紅葉館という有名

な高級料亭があった。辺りは紅葉山と呼ばれる小高い丘で、尾崎徳太郎（紅葉）はその近くで生まれたことから、号を「紅葉」と称するようになったと言われている。

漣が初めてこの紅葉館を訪れたのは、明治二十二年十二月六日のことであった。その日、読売新聞の創刊十五周年の祝賀会が紅葉館で催され、時折紙上で作品を発表していた縁により、漣は硯友社の主だった同人らと共に招かれて行ったのだった。

紅葉館は明治十四年二月十五日に新築落成した豪壮な料亭で、その経営者のひとりに言語学者の子安峻がいた。子安は、当時日就社という印刷会社の社長を務めており、そこから読売新聞を発行していて、後に初代読売新聞社長にまでなった人である。

この読売の祝賀会の際、漣ら硯友社の同人たちは子安の推薦を受け、紅葉館への入会を許された。紅葉館は当時にしては珍しく会員制の料亭だったのである。入会に際しては委員の厳重な審査があり、歌舞伎の市川団十郎や尾上菊五郎が入会を申し込んだところ、断られたという。河原者を蔑む風潮がまだ残っていたのである。その点、漣らの入会が認められたのには、この頃には文士の地位もようやく世間に認められ

るようになっていたからとも考えられようか。因みに紅葉館の年会費は十円だったとか。

その翌年（明治二十三年）の四月二十二日、すでに二十歳に達していた漣は麹町区役所で徴兵検査を受けた。ところが、丁種不合格と判定された。痩せすぎていて兵役に適さないというのだった。

漣は大喜びで紅葉の家を訪れた。紅葉も喜び、それでは祝杯を上げようということになった。そこで川上眉山を誘って紅葉館に出かけ、紅葉、眉山の三人は茶室で酒を飲みながら愉快に談笑して一夕を過ごした。

八日後の四月三十日にも、漣は、紅葉、眉山、武内桂舟との四人で紅葉館に行っている。この時、初めてまだ年若い女中の須磨が漣らの席に着いた。目鼻立ちの整った利発そうな少女だった。

実際、須磨は話の受け答えもはきはきして、打てば響くような鮮やかな対応を示した。聞けば歳はまだ十四とのことだったが、漣は彼女のそんな頭の回転の良さに好意を抱いた。

以来、漣が紅葉館に行くとき、必ずと言ってよほど須磨が同席するようになった。こうして逢瀬を重ねるうちに、須磨は漣に好意を寄せるようになり、漣もまたそれにはまんざらでもな

く思うようになっていた。紅葉の取持ちもあり、二人の仲は急速に親密さを増していった。浮名が立つにはそれほど時間はかからなかった。

『こがね丸』はこうした状況下で書かれたものだった。「少年文学」の企画を漣のところに持ち込んだ博文館の大橋新太郎は、当然漣と須磨の噂を耳にしていたはずである。ところが、新太郎もまた紅葉館に通ううち、いつの間にか須磨の魅力に取り憑かれてしまったのだった。それからというもの、新太郎は虎視眈々と機会を窺っていたものと思われる。

明治二十五年の十一月、漣は以前通っていた称好塾の杉浦重剛の薦めにより京都日出新聞の主筆として京都に赴任することになった。漣は以前からドイツに留学したいという思いを抱いており、そのためには洋行にかかる費用を蓄える必要があったのだ。日出新聞では毎月四十円の月俸が約束されていた。毎月定収入が得られるのは、漣にとつては好都合であった。二、三年もすれば留学資金も充分貯まるはずだった。この間、須磨には会えなくなるが、それも致し方ないと覚悟をきめ、漣は京都へ旅立っていった。

こうしていよいよ新太郎にとつてはまたとないチャンスが巡ってきたというわけだ。新太

郎は、足繁く紅葉館に通い続け、須磨と親しく言葉を交わすうちに、不図したことから彼女の家の窮状を知る。そこに付け込んで彼女を口説き落とし、遂には江の島への一泊旅行に誘い出すことに成功した。後日、このことを知った紅葉は京都の漣に手紙を送り、「去月上等汽車にて両々相携へ、江の島に一泊、これ歓会の第一にて、其前からスの字(須磨)の里方を扶持し、月々手当を給し、いよいよ此八月過には、金屋阿嬌を貯ふる事確定の由」と伝えた。即ち、新太郎は金の力により首尾よく須磨を自分の囲い者にするに成功したというのだった。

一方、漣の方は、東京を離れて時が経ち、赴任先の京都でも遊びを通じて馴染みの女ができてしまえば、自ずと須磨に対する思いも薄れていった。須磨とはそれほど深い仲にはなっていなかったのである。実は京都で馴染みになった女との間を取り持ってくれたのは、他ならぬ新太郎であった。新太郎には漣の留守中に須磨を我が物にしたことに気の咎めるところもあったのだろう。

そこで、商用で京都を訪れた際、新太郎は漣の様子を探り、ある女との浮名が流れていることを突き止めると、進んで二人の間を取り持ったのだった。だから、漣は新太郎に対しても恨

むような気持はさらさらなかったのである。ところが、須磨の心変わりを赦せなかったのが紅葉である。江戸っ子肌で正義漢の紅葉は、弟分の漣を想い義憤に駆られた。そしてある時、紅葉館の酒席で須磨を厳しく詰問し、廊下に連れ出して足蹴にしたというのである。「この売女め！」とその時紅葉が罵ったかどうかは知らないが、これが後の『金色夜叉』の熱海の海岸の場面になったと言われている。



昭和 53 年夏 信濃追分の藤林家別荘にて
向かって右端：藤林道夫氏、右から 3 人目：巖谷國士氏、左端：筆者

明治二十七年(一八九四年)十二月四日、漣は二年ほど主筆を務めた京都日出新聞の職を辞し、東京に戻ってきた。

折しも日清戦争の最中であつた。また、その翌年には内国大博覧会や桓武天皇千百年祭等の催事も控えており、新聞社は多忙を極めていた。そんなわけで、日出新聞としては漣を手放したくはなかつたらしいのだが、漣の心はずでに京都の地からは離れてしまつており、彼は一刻も早く東京に帰りたという思いに駆られていたのだつた。

その理由は、川田綾子の存在にあつた。漣は京都在任中も、正月、春、夏には休暇を願い出て東京に帰り、その度に牛込若宮町の川田邸を訪れては綾子と会つていた。

出会つた頃僅か九歳の少女だつた綾子も、漣の京都在任中にはすっかり成長して娘らしくなつていた。清純な印象も相変わらずで、漣はそんな綾子に会う度に、「やはり自分にはこの女性しかいない」という思いに至るのだつた。

そう思う一方で、漣は、このまま京都に居続ければ、自分は京女の色香に惑わされ、泥沼の深みに嵌り込んで取り返しのつかないことになつてしまふのではないかとおそれを抱いていた。そういう情に脆い自分の性格を漣もよ

くわかつていたのである。

そんなことを思い悩んでいたところに、博文館の大橋新太郎から新雑誌「少年世界」の編集主任に迎えたい旨の申出があった。日出新聞を辞めるにあたっては、この新太郎が熱心に新聞社の説得に努めてくれた。また、紅葉も口添えしてくれて、当分の間は客員待遇で、原稿だけは求めに応じて寄稿するというので諒解を取りつけ、ようやく帰京することができたのだった。

東京に戻りさえすれば綾子にはいつでも会えると思っていた。実際、東京での落ち着き先の片づけを一通り済ませると、漣は早速川田邸を訪れている。そうして、前年の夏以来久々に綾子と対面した時、漣はあらためて彼女の犯し難い美しさに強く心を打たれた。この時、綾子は十八歳になっていた。

以来、漣は頻繁に川田邸に足を運ぶようになっていった。会えば漣の綾子を思う気持ちもさらに強まっていた。漣はそんな自分の胸の想いだけでも何とかして早い機会に綾子に伝えたいと思った。だが、実際に会ってみると、綾子の汚れを知らぬ純粹さに気圧されて、なかなかそれが言い出せなかった。女遊びの経験はそこそこあったものの、素人の綾子の前ではまるで初な

少年のように委縮してしまう漣なのであった。

そんなもどかしさ、自身の不甲斐なさを紛らすため、漣はまた遊里に足を運ぶようになった。週に一度は綾子との逢瀬を重ねながらも、その一方で色里に足繁く通い、新しい女に入れあげる自堕落ぶりに、漣の心は更に荒んでいった。帰京して一年余りが過ぎた明治二十九年二月二日、綾子の父川田甕江（おうこう）が突然他界した。六十七歳であった。

この甕江の死をきっかけとして、漣は綾子を娶るといふ一大決心を固めた。早速、漣は父の一六に相談を持ち掛けた。ところが、意外にも父からは冷淡な反応しか返ってこなかった。綾子を嫁にもらうことには賛成だが、果たして彼女が来てくれるかどうかといういささか頼りない口ぶりだったのである。漣としては、甕江は父の親友でもあったところから、もっと積極的に後押ししてもらえるものと思っていたのだったが……。

甕江亡きあと、川田家は長男の鷹が跡を継いでいた。したがって、綾子の件は新しい家長である鷹の意向を仰がねばならなかった。ところが、父の一六はこれまで鷹とは疎遠で、親しく言葉を交わしたこともなかった。むしろ川田塾に住み込んで不断に接していた漣の方が鷹と

は年も近かったし（鷹は漣より一歳上）、親しい間柄であったと言える。そこで、一六は漣に直接自分で当たってみてはどうかと勧めたような次第であった。

この年の七月二十一日、漣は意を決して川田家に鷹を訪ねていった。そして何気ない風を装って、綾子を嫁にもらえまいかと切りだした。ところが、どうも鷹の反応が煮え切らなかつた。あたかも難題でも吹っ掛けられたように困惑している様子がありありと見えたのである。そして、自分は一応家長ではあるが、親類も兄妹もあり、それぞれの考えもあるだろうし、折角の申出だが、今は返事ができないと言うのであった。それは親類や兄妹というよりは、むしろ鷹自身が思うところあって難色を示しているのに違いなかつた。

何故か？ 漣は考えた。思い当たるのは、父一六の借財の所為で巖谷家が没落して窮状を呈しており、漣自身もまた将来の不安な文士稼業であるということ。先のおぼつかない、収入の不安定な文士風情に大事な妹を嫁がせるわけにはいかないと鷹は考えていたのかも知れない。いや、きっとそうに違いない。突き詰めればそんな結論に至らざるを得なかつた。

鷹の言い訳めいた非情な言葉にすっかり落

胆しながらも、漣は気丈な風を装い、「無理強
いするつもりはない。だめならだめでいいんだ」
と言ってその場を引き下がった。

その帰り、月明かりの夜道を歩きながら、漣
は込み上げてくる寂しさに堪え兼ねて涙を流
した。

その翌日、漣は紅葉宅を訪れ、事の顛末を報
告した。

漣の報告を聞いた紅葉は、そんなことになら
ないように予め手付を打っておけと言ったで
はないかと漣をなじるように言って笑った。紅
葉の言う「手付」とは、肉体交渉をもつか、少
なくとも接吻くらいはしておくことを意味し
ていた。大作家の紅葉は、同時に偉大なる俗物
でもあったのだ。漣が言い訳をするように、そ
こまではつい手が及ばなかったと打ち明ける
と、紅葉は「意気地のない奴」と小馬鹿にしな
がらも、「お前には俺たちがついていて。俺た
ちがもつとよい嫁さんを見つけてやるよ」と漣
を慰めてくれたりもした。

そんな風に弟分を思い遣る一方で、川田家の
断りの理由について紅葉は大いに立腹した。
「これは巖谷一人の問題ではない。我々文士に
対する偏見であり、侮辱でもある」と言って紅

葉は息巻いた。

それから三週間あまりが経った八月十三日、
漣は気晴らしのために江の島の金亀楼に出か
けていった。そのついでに、その頃片瀬に住ま
いを移していた江見水蔭宅を訪れたところ、偶
然にも紅葉が遊びに来ていた。その翌日には石
橋思案と武内桂舟もやって来た。

これら四人が集まったところで、紅葉が新た
に計画している小説の腹案を語った。それはイ
ギリス人作家バーサ・M・クレーの『女より弱
き者 (Weaker Than a Woman)』を基にした翻
案で、ある男が初恋の女を有力な恋敵のために
奪われ、以来性質が一変して金の亡者になって
しまったという内容の話だった。紅葉は当時流
行していた米国の廉価版小説で偶々クレーの
作品を読んでいたらしい。

これが後に『金色夜叉』として主に読売新聞
に発表され、大好評を博したことはご承知のと
おりである。作品は明治三十年（一八九七年）
一月一日から明治三十五年五月十一日まで、実
に五年余りの長きに亘り読売に連載され、途中
明治三十六年一月からは「新小説」にて書き継
がれた。「新小説」には三号まで連載されたも
のの、それでもなお未完のまま、紅葉は病に斃
れ、明治三十六年十月三十日、遂に還らぬ人と

なった。享年三十五歳の若さであった。なお、
未完に終わった部分は、後に紅葉門下生の小栗
風葉が書き継いで『終編金色夜叉』として完成
させた。

以上ここまでが尾崎紅葉の『金色夜叉』にま
つわる話である。

実は、この他に漣自身によって書かれた『金
色夜叉の真相』というある種の暴露本があり、
次にこれについて書いておこう。

話の発端は、昭和二年の三月にアルス社とい
う出版社から「児童文庫」というシリーズもの
が出て、その第十巻に漣の『日本お伽噺』が収
録されていたことであつた。この作品は以前博
文館より出版されたもので、それから相当な年
月が経っていたが、版權は依然として博文館に
あるとして、大橋新太郎が出版権の侵害を主張
し、謝罪と賠償を要求してきたのである。

この時、漣五十八歳。功成り名を遂げて、す
でに晩年を迎えていた。作品を書くことはほと
んどなくなり、専ら口演活動に力を入れ、全国
の学校めぐりをして日々を過ごしていた。この
頃の漣を評して、内田魯庵は「文壇よりもむしろ
教育界に近い人」と述べているが、まさにそ
の通りであつた。

新太郎はそんな漣にはもう作家としての利用価値はないと思つたのかもしれない。ここらが縁の切り時と覚悟の上か、新太郎は思いの外強硬な姿勢を見せ、漣が詫びを入れてもそれだけでは容赦せず、引き続き賠償を迫るのだった。当時の漣の妻の勇子までが新太郎の家を訪ねて諒解を得ようとしたが、無駄であった。

賠償に応じようとしないう漣に代わって、新太郎はアルス社に賠償を求めるといふ挙に出た。さすがに人の好い漣もこれには激昂したが、自分の所為でアルス社に迷惑をかけるわけにもいかず、結局はアルス社からの印税の全額を博文館への賠償金として支払うこととし、これだようやくこの件は結着がついたのだった。

しかし、後味の悪さはいつまでも残つた。そして思い出すたびに漣の中で激しい怒りが込み上げてきた。温和な性格の漣がこれほどまでに激しい憤りの感情を覚えたのは初めてのことであった。

その激しい憤りの感情を抑え兼ねて、漣は大橋新太郎の私生活を暴露するべく『金色夜叉の真相』を書いた。五百枚近い原稿を一気呵成に書き上げると、間を置かずに黎明閣という小さな出版社からそれを刊行したのである。その発行日付は昭和二年十二月二十八日となつてい

た。この日付に特別な意味が込められていると漣四男の巖谷大四氏が『波の登音——巖谷小波伝——』の中で書いているが、それはこの四年前に病没した川田綾子の月命日に当るからだという。

『金色夜叉の真相』を書いたとき、漣はある決意を固めていた。それは博文館の大橋新太郎の私生活を暴露せんとすの意図で書かれたものではあつたが、新太郎と関わっていた漣自身のこととは当然として、漣と関わりのあつた人たちのこともまた赤裸々に語られていた。一たびこれが世に出されれば、一大スキャンダルを巻き起こすことは明白だった。そうなれば漣の意図とは別に、親類縁者をはじめ、そこに登場する多くの人々にも多大な迷惑が降りかかる。それを承知の上で敢えて公刊するからには、やはり漣が悲壮な決意を固めていたと考へざるを得ないのである。

漣は予め秘かに死の決意を固めていたらしい。これについては、大四氏が十二歳の時、昭和二年の暮れの思い出として、『波の登音』の中で述べている。漣は多量の睡眠薬を呑んで自殺を図つたらしかった。大四氏は、長姉の夫で外科医である泉源吉が漣の胃の中のものを出し出させる処置をしているところを障子の硝

子窓から覗いていたという。幸い、処置は成功して、一命は取り留めた。

『金色夜叉の真相』は初版一千部が印刷された。漣はこれにより綾子の夫川田豊吉から嚴重な抗議を受けた。そしてこの初版はすべてを売り尽くさないうちに絶版とされた。当の大橋新太郎は直接漣には抗議もせず、金の力でその大半を買い占め、廃棄させたという。

これでスキャンダルが広まるのは回避できたかのように思われるが、私の調べたところでは、この問題作は、その後昭和三年一月に八刷、二月には五回も重版して十三版となつており、かなりの版を重ねて広く世間に流布していたことが窺われる。この事実からすれば、大四氏の主張する漣自殺未遂説は少々怪しく思えてくる。

そもそも、『金色夜叉の真相』刊行の意図が大橋新太郎への私憤を晴らすことにあつたのか。これも問題である。エミール・ゾラの翻訳家として知られる小田光雄のブログ記事によれば、この作品が出版される直前には、各新聞社を招待し、芝の紅葉館で大々的に発表を行ったというから、漣と黎明閣が結託して一山当てようとする目論んでいたことは間違いない。おそらく、漣自身にとっては経済的な問題があつて、

黎明閣に乗せられるかたちで刊行に至ったというのが真相なのではないだろうか。

それにしても、何故漣が自殺を企てなければならなかったのか。これについては未だによくわかっていない。

この一件以来、漣はとみに気力も衰えて、その眼はあらぬ方をぼんやり眺めていることが多くなった。体力的にも衰えはじめ、年が明けてからは再び地方回りの口演活動を始めたものの、病気がちで、出先で病に斃れることもあった。口演活動は死の直前まで続けられた。

そして昭和八年九月五日の朝、静かにその生涯を閉じた。死因は直腸癌。六十四歳であった。

重く散って軽く掃かるゝ一葉かな

極楽の乗り物や梧桐一葉

枕元に残された走り書きの遺書の中にはそんな辞世の句が書かれていた。

(二〇二二年二月一日)

【参考文献】

巖谷大四『波の跫音 ——巖谷小波伝——』(新潮選書)

尾崎紅葉『硯友社の沿革』(青空文庫)

内田魯庵『硯友社の勃興と道程 ——尾崎紅葉——』(青空文庫)

堀 啓子『明治期の翻訳・翻案における米国廉価版小説の影響』(出版研究 二〇〇七年 三十八卷)

小田光雄『博文館と巖谷小波「金色夜叉の真相」』(古本夜話一六六・ブログ)